



名寄市立大学の窓から

知への誘い

vol.94

「保育所と紫スーツ」

保健福祉学部 社会保育学科 講師 長津 詩織



8月から12月にかけて、本学科の学生は全道・全国の幼稚園や保育所、福祉施設、特別支援学校で実習しています。新型コロナウイルスの影響下で、実習が本来に可能なかと直前まで心配でしたが、今のところ大きな問題はありません。学生の頑張りをたたえるところにも、何よりも、実習を受け入れていただいた施設のご理解とご協力に大変ありがとうございます。と書いています。



実習が始まる前に、学生には実習先への事前訪問という関門があります。今年度は電話での訪問に変更したところがほとんどですが、例年は実習先へ直接ご挨拶にうかがいます。学生

が緊張しながら訪問日時を決める電話をかけ、慣れないスーツを着て実習先に向かう様子を、教員としては微笑ましくも心配しながら見守っています。

数年前、この事前訪問に関して、ある年配の保育者から次の話を聞きました。「このあいだ事前訪問に来た学生がね、男性の方なんだけど、スーツを着てきたんですよ。上下紫のスーツに、黒いシャツに、銀色のしましまのネクタイ。」思わず笑ってしまった私に、同じく苦笑いした保育者はこう付け加えました。「EXILEの影響でしょうかねえ。」



その実習生は、私が当時勤務していた大学の学生ではなく、私にとっても見ず

知らずです。でも、なんとなくその姿やキャラクターが思い浮かびませんか？（もちろんEXILEに非はありません。）このエピソードが私の印象に残っているのは、「保育所と紫スーツ」という、ちぐはぐさがおもしろかっただけでなく、それを「EXILEの影響」というクッションで吸収する、保育者のあたたかい視線があったからでした。「今どきの若者は非常識だ」、「親の教育がなっていない」、「養成校では何を教えているのか」と言われてもおかしくない場面です。しかしこの保育者は、若者の視点に寄り添い「非常識」な行為の理由を想像しようと努力した上で、社会一般のルールを伝える方法を考えられていて、私自身も普段の学生との関わりを省みる機会になりました。

赤木和重さんという研究者の著作に、「どの子もバカだと思って思われたくないよね」というフレーズが出てきます。学校教育での取り組みを紹介する流れで出てくる言葉ですが、子どもだけではなく、大人だって同じですよ。この一言には、他者の尊重とか、他者に対する寛容さなどが凝縮されているように思います。これまでの「普通」が問い直される現在だからこそ、自分とは異なる「普通」をもつ誰かへの想像力を失わずにいることが、みんなの「普通」の日常を作り直すためにも大切なのではないのでしょうか。

紫スーツの彼が、今頃どこかの保育施設で、新型コロナウイルスに注意しながら子どもたちと元気に日々を過ごす、素敵な男性保育者になっていくといいなと思います。



※引用文献

赤木和重 著

アメリカの教室に入ってみた
一貧困地区の公立学校から超インクルーシブ教育まで
ひとなる書房

大学図書館へようこそ！

毎年大学祭で行われていたビブリオバトルは残念ながら中止となりましたが、その代替イベントとして「ポップ大賞」を行うことになりました。お薦めの本についてはがきサイズの紙面でどう表現するかがポイントです。

【10月の開館について】

平日は9:00～21:00の開館です。

土曜日は17:00閉館です。

利用できる席数を減らしていますので学外の方の閲覧席利用はご遠慮ください。図書の出・返却のみです。



◆問い合わせ
名寄市立大学図書館

☎01654@7671(直通)
✉ncu_library@nayoro.ac.jp

大学図書館にはこんな本があります

～「知」への誘い～からもう1歩～

保育の仕事や、特に男性保育士を描いた図書を紹介します。

『保育者のためのお仕事マナー-BOOK』

横山 洋子・中島 千恵子/著 学研プラス

→幼稚園・保育園で働く人はもちろん、社会人としての具体的な場面での言葉遣い等、マナーの基本がわかります。

『ほお…ここがちぎゅうのほいくえんか。』

てい先生/著 KKベストセラーズ

→ある男性保育士によるツイッターでのつぶやき集。子どもたちのかわいらしい言葉が満載です。

『戦うハニー』

新野 剛志/著 角川書店

→無認可保育園で働く男が数々の難題に立ち向かう小説。